

動労の変質＝暴力支配と路線的右傾化を現。

動労千葉破壊策動の総括も できない「本部」暴力集団

方針上に現れた問題点の第一は、千葉問題について「別冊でやる」と称して、職場討議にふそうとしないことである。このことは、千葉地本排除↓動労千葉破壊策動の総括もできない破産を自らが立証していることに他ならない。

この一年間の最大の組織問題としてあった「千葉問題」について「中野・中江一派」などといかに強弁しようが三万人の組合員と億を超える組合費のむだづかいをもって強行した動労千葉破壊策動が、一四〇〇名のうちのだれ一人も獲得出来なかったという現状をごまかすことはできない。また「千葉再建の闘いは、動労総体の組織防衛の闘い」として位置づけていかなければならない」とは一体何か。

これは「千葉問題」を通して動労の意識分裂・組織的亀裂が進行していることを必死になって覆い隠すためのあがきである。

三里塚・ジェット闘争からの逃亡！

第二の問題点は、三里塚・ジェット闘争である。津山大会では「反対同盟以外の住民と共闘する」などというできもしない方針を決定したが、その取り組みはどうなったのか。また、今後どの様に闘うのか。この方針案では一言も触れられていない。つまり「一線を画する」という津山大会方針は組合員をごまかすためのウソであり、闘わないためのコジツケであることがはっきりと暴露されてきている。

安定宣言の破産を自認 支離滅裂な反合方針

第三に、この方針案では「貨物安定宣言」の路線的破産もまた鮮明につき出されている。それは「総括」の部分と「方針」の部分では「国鉄合理化」の捉え方が、一八〇度違うということに端的に現わされている。「総括」では、「安定宣言」を「正しかった」と強弁しているが、「方針」では、①政策要求闘争をやるべき、②多様な戦術的対処、③貨物をストに入れることも検討などと逃げ口上を書いている。まさに、国鉄大会

「動労車新聞号外」(七月七日付)に動労第三五回定期全国大会運動方針(案)が、職場討議資料として出されてきた。この方針案によって「本部」暴力集団の組織的危機と運動の破産がますます鮮明に自己暴露されてきている。この方針案の問題点の細部については「日刊動労千葉」の紙面をもって明らかにしてゆくが、本号では、特徴的な点について総括的に明らかにする。

第四に「水本」デマ運動である。「真相を究明する会」を隠れみのに、「水本」＝革マルの運動と動労の運動の一体化をさらに極端に強めている。これまでも大量動員などで革マル派以外は誰も支援しない「水本」デマ運動を支えてきたものは動労であり、今や「動労はセクトそのものである」と世間から思われても仕方のない状況と言わなければならぬ。この状況を、暴力の実行部隊の強化をめざしセクト的つながりを一層強化しようとしているのがこの方針の中味である。

暴力をもつてする右傾 化路線の破綻は必至！

このような誤まれる路線・方針では組合員が納得する訳はない。だからこそ暴力の実行部隊をかき集め、「造反」の意見を封殺することにやっきとなっている。しかし、第一〇五臨中で示された「特別決議」をはじめ、良心的組合員の決起は、このような暴力支配を打ち破るものとして全国で始まっている。われわれが主張し続けてきたことの正しさが、次々と事実によって立証されている。変質せる動労暴力支配と路線的右傾化を体现する第三五回全国大会方針を粉碎し、動労の戦闘的再生をかちとろう。

セクトへののめり込み「水本」！

日刊
動労千葉

79.7.20

No. 177

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電二五八・九・公電局三二二七二〇七)

80年代をきりひらく
動労千葉と
ともに

千葉市民会館大ホール
7月28日(土)午後5時半

よびかけ人 一 作 満
戸村 仁 五 郎 久 雄
永 井 喜 明 平 郎 治
高 島 生 一 銘 光
杉 浦 針 生 田
北 浅 田

全力で
結集しよう！

7・28国民大集会